

心理的特性と余暇活動に関する調査研究

—職業訓練校性を事例として—

職業訓練大学校 塚 本 真 也

職業訓練大学校 小 田 南 州 生

職業訓練大学校 松 原 五 一

勤労青少年指導者大学講座 寺 光 鉄 雄

近畿大学 田 口 節 芳

I 研究目的

多様化がいつそうすすむ余暇社会において、余暇の過し方を一義的にレクリエーションに求めることはできないが、少なくとも余暇の善用という教育的観点に立ってみるならば、レクリエーションはすぐれた価値をもつものと考えられる。とりわけ学校教育過程にある児童生徒や学生においては、余暇教育の必要性が指摘^①されている今日、レクリエーションの担う役割は大きくまた重要である。

レクリエーション活動は、「いつでも、どこでも、だれでも」と唱えられた標語のもと^②にひろく社会に浸透しているが、いまひとつ大切なことは「その気になる」ことである。その気になる、とは平易なことばであるが、レクリエーション活動は主体性のある自発的で独創的な活動の中に自己を積極的に表現してゆくことが求められる。このような心構えがあってはじめて諸々の活動もレクリエーションと呼ばれるであろう。すなわち、必要不可欠な心理的要因として「自主性」がレクリエーション活動にはなければならぬ。

本研究の目的は、余暇の過し方に自主性の水準によってどのような差異が生じているのかを明らかにするところにある。

II 研究方法

1. 調査および検査方法

研究目的に示した視点から質問紙法による余暇活動調査と自主性の水準を定める心理検査を同一時に実施した。調査の基礎的な枠組みは、1) 対象者の性別、年齢、学歴などの基本的属性について、2) 余暇活動の実際について3) 生活実態や意識についての3領域に決定した。余暇活動の実際では、主として余暇時間量と活動内容を柱に構成したが、余暇活動は比較的広義に解釈してなるべく数多くの活動を網羅した。一方、自主性の心理検査は既存の検査法を検討した結果、主観的側面における自主性の概念構造を明らかにした上で質問紙法^③によって作成された石川らの「自主性診断検査」が最適との判断にたっした。この検査は、10の下位検査から組み立てられており、それぞれは自発性、主体性、独立性、自己主張、判断力、独創性、自律性、自己統制、責任性、役割認知である。しかし、本研究ではこれら10の下位特性からさらにレクリエーション活動にとって基本的要件と考えられる自発性、主体性、自己主張、独創性、自律性の5特性を選定した。また、この検査は元来小学校5年生から中学校3年生までを適用範囲としているが、検査内容を具体的な項目にわたって吟味した結果、検査問題の場面構成が日常の生活習慣や学習態度、人間関係な

どわかりやすく多面的に配慮されており、後述する検査対象の職業訓練校生に適用しても逸脱する危険性は低いとみて採択にふみきった。

2. 調査および検査対象

全国に配置されている総合高等職業訓練校（88校）から副次抽出法にならって6校（東北1、首都圏1、北陸1、近畿1、中国1、九州1）を選び、さらにそこから中学校卒の養成訓練課程の男子、各校60名計360名を無作為に抽出した。有効標本回収率は94.2%の339であった。尚、職業訓練校とは昭和33年制定の職業訓練法に基き設立されたもので、総合高等職業訓練校をはじめ専修職業訓練校、身体障害者職業訓練校などがあり、現在全国に400余校を数えるにいたっている。そして、そこに学ぶものは養成訓練課程に限っても2万人にのぼる規模である。

3. 調査時期

調査期間は、昭和53年11月14日から23日までの10日間であった。

Ⅲ 調査および検査結果

1. 調査対象の一般的特性について

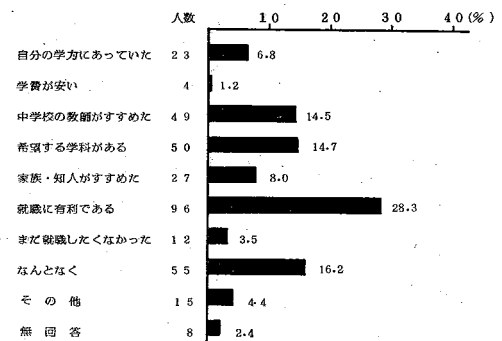
対象者が中学校卒の養成訓練課程の男子に限定されているため、性別は勿論男であり、年齢分布は15才から20才となった（表1）。

表1 年齢分布

年 令	人 数	%
15才	43	12.7
16才	158	46.6
17才	114	33.6
18才	9	2.7
19才	8	2.4
20才	2	0.6
無回答	5	1.5
計	339	100.0

2年課程にもかかわらず分布が少し広がったのは、高校中退者が含まれているためであるが、全体の92.9%は15才から17才である。従って学歴はみな中学校卒となる。高校進学率が90%を越す今日の状況において、訓練校へ進路を決めたその動機は、「就職に有利である（28.3%）」、「希望する学科がある（14.7%）」、「自分の学力に合っていた（6.8%）」の回答割合からみれば積極的肯定的と受け止めることができる（図1）。

図1 入 校 動 機



訓練校生の1日の生活は、同世代の高校生と近似して朝9時始業、夕方3時30分終業の教育訓練が組まれている。授業科目には専門の学科実技の他に数学もあれば体育もある。そして、夏休みもあれば冬休みもある。住居は親元の自宅がほとんどであったが、他には寮（14.7%）、親戚の家（0.6%）などがわずかにみられた。家族構成は、平均5.1人で全国平均の3.4人を上回る大きさであったが、父親あるいは母親の欠損率は各々13.6%、6.2%であり、同世代のそれが9.3%、1.7%であることから比較するといくらか高い欠損率であった。訓練校への通学については、1時間以上を要する遠隔地通学が多いためか、方法も電車（42.2

%)、オートバイ (7.1%) など乗り物を利用するものが目立った (図2、表2)。

図2 通学時間

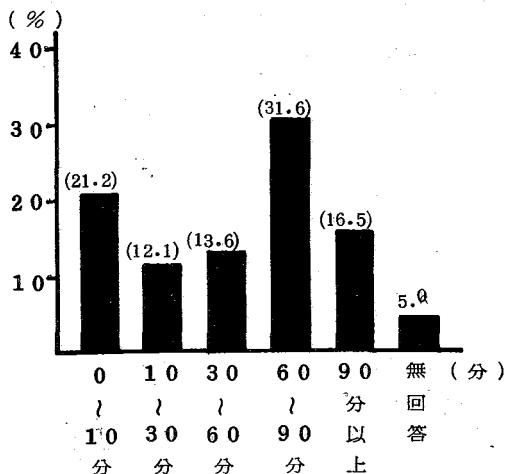
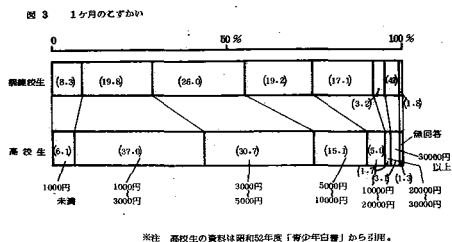


表2 交通手段

交通手段	人数	%
徒歩	63	18.6
自転車	70	20.6
バイク	24	7.1
バス	23	6.8
電車	143	42.2
その他	12	3.5
無回答	4	1.2
計	339	100.0

1ヶ月の小遣いは、5,000円を境に全体が二分されたが、割合からすれば3,000円から5,000円が最も多かった (図3)。



※注 高校生の資料は昭和52年度「青少年白書」から引用。

この幅が最も多いのは高校生も同じであるが訓練校生で1万円以上と答えたものが25.0%にもものぼることから相対的には額面は大きい傾向にあるといえよう。表3は、今一番欲しいと思っているものを上位から序列をつけて並べた表である。

表3 いま一番欲しいもの

品目	人数	%
オートバイ	92	27.1
乗用車	64	18.9
ステレオ	64	18.9
カメラ・8ミリ	24	7.1
カラーテレビ	8	2.4
楽器	8	2.4
ラジオカセット	7	2.1
テープデッキ	5	1.5
スキー用具	4	1.2
自転車	3	0.9
電卓	2	0.6
テープレコーダー	1	0.3
扇風機	1	0.3
ハードライヤー	1	0.3
和洋ダンス	1	0.3
テニス用具	0	0.0
冷蔵庫	0	0.0
ラジオ	0	0.0
白黒テレビ	0	0.0
その他	24	7.1
無回答	30	8.8
計	339	100.0

1位のオートバイ (27.1%) は勿論のこと、ステレオなど上位を占めた希望品目は高額商品だが、この希望は同世代の高校生男子にも当てはまり必ずしも訓練校生特有ではないようである。

日ごろの生活全般について、その満足感の度合をたずねた結果は図4にみられるとおりであるが、「どちらともいえない」という中庸的な回答が目立ち、割合も半数の48.7%を占めた。「大いに満足」もしくは「まあ満足」と満足感を表明したものは1/4強の26.9%、これに対し「不満」、「どちらかといえば不満」が同じよ

表5 現在の悩み

悩みごと	人数	%
特に悩まない	168	49.6
学校の成績	20	5.9
自分の性格	24	7.1
進路の決定	42	12.4
家庭・家族	9	2.7
異性との交際	38	11.2
友人との交際	20	5.9
その他	9	2.7
無回答	9	2.7
計	339	100.0

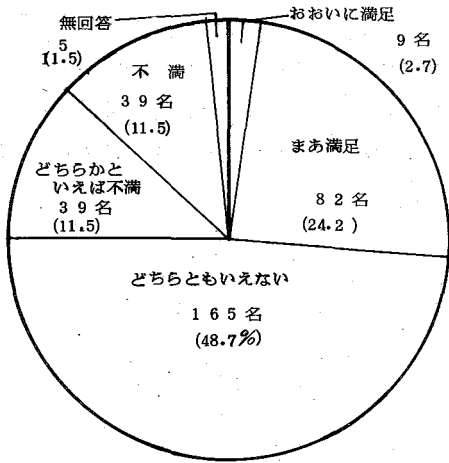


図4 生活満足度

うに1/4弱の23.0%となった。不満の主な所在は、家庭と学校に分けてみると、家庭に不満(22.5%)と家の暮しむきが不満(10.0%)、学校がおもしろくない(8.8%)と勉強がおもしろくない(3.8%)となりどちらかといえば、学校より家庭環境に起因する割合が大きかった。しかし、不満の最も大きな理由は、「自由時間の不足」であり、割合も群を抜いて41.3%であった(表4)。一方、現在抱えている悩みや心配ごとについては、「特になし」が半数に近かった(表5)。

表4 不満の所在

理由	人数	%
専門の勉強	3	3.8
自分の健康	1	1.4
家の暮しむき	8	10.0
自由時間	33	41.3
家庭	18	22.5
訓練校	7	8.8
その他	10	12.5
無回答	0	0.0
計	80	100.0

この割合は、高校生と比べてみれば、置かれている立場にいくらかの差異はあるものの大枠ではどちらも中等教育(訓練)のシステムの一環にあり、高校生が11.0%であったことを考慮すると大きな生活意識の隔りがあるといわねばならない。特になしを除いた次いで多い割合に「進路の決定」が入ったが、逆に少ないのが「家庭、家族」であった。しかしながら、前述の生活満足感で不満と答えた理由が家庭環境に所在する割合が相対的に大きかった結果を考慮すると、悩みごとで示された家庭、家族の割合2.7%は小さい数値である。

2. 自主性診断検査の結果について

下位検査の粗点およびその合計である総点の平均と標準偏差を表6に示した。

表6 粗点および下位得点の平均と標準偏差

組別	下位検査	総点	自覚性	主体性	自己主張	対抗性	自律性
全体 N=339	67.5 17.86	13.5 4.22	14.6 4.67	11.8 4.29	14.5 4.72	13.0 4.72	
自主性の高い組 N=110	86.7 7.71	17.0 2.98	18.7 2.83	15.2 3.11	18.6 2.42	17.2 3.59	
自主性が中位の組 N=131	66.9 5.13	13.4 2.88	14.7 3.16	11.5 3.17	14.6 3.22	12.7 3.05	
自主性の低い組 N=98	46.6 12.23	9.8 3.68	9.9 3.53	8.3 3.71	9.8 3.96	8.8 3.65	

注) 総点のレンジは、0-120、下位得点は、0-24である。

粗点は、年齢による誤差を消去するためにパーセントイル値に換算する方法が本来ならばとられるが、ここでは適用できないためにそのままの数値を使った。各レンジは0~24点である。総点も従ってこの場合0~120点となる。図5は総点のヒストグラムであるが、比較的正規分布に近い分布を描いていると考えられる。また、訓練校生の粗点が検査適用範囲の制限をうけて、小中学生の延長線上にのって来るとは必ずしもいえないが、参考までに作成したのが図6の学年別平均値と標準偏差である。当検査の

図5 総点のヒストグラム

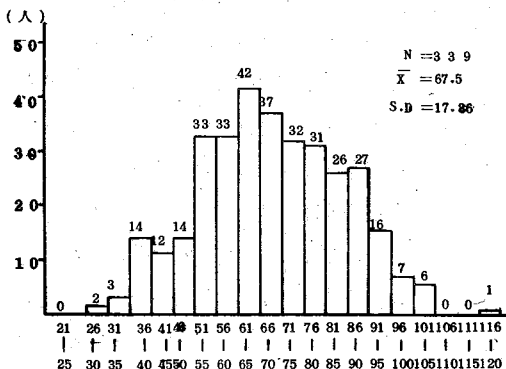
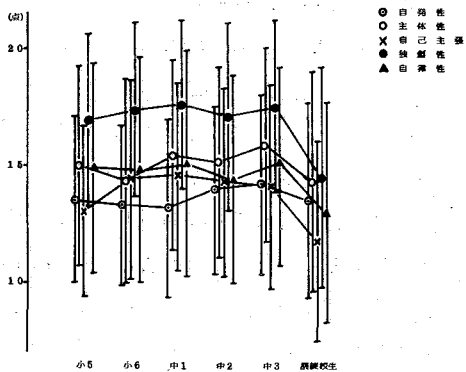


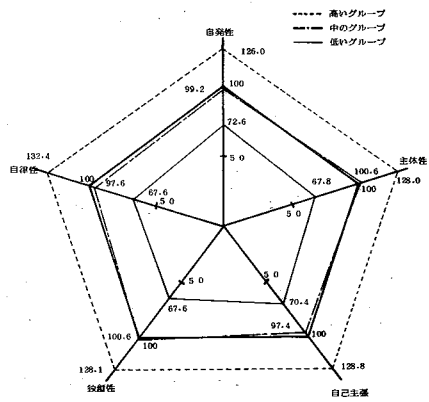
図6 下位検査の学年別平均と標準偏差



標準化の資料^⑪によれば、総点の平均は加齢とともにわずかながらも上昇してゆくことを認めているが、下位得点については一様の傾向を認めていない。しかしながら、図6にみることで、少なくとも訓練校生の粗点はどの下位特性でも中学生を下回っているのは明瞭である。これは、当然として総点でも同じことになり、小学校5年生から中学校3年生までが、順に、73.7、74.7、76.1、75.2、77.1と続くのに対して、訓練校生は67.4と低い水準であった。

総点の平均と標準偏差から全体を3区分してグループ化を試みた。まず、(平均+1/2標準偏差)以上を自主性の高いグループ、(平均-1/2標準偏差)以下を自主性の低いグループ、そしてその中間を中のグループとした(表6)。配分比は、高中低で(84:100:75)になった。それぞれのグループごとに下位得点平均値を平均百分率に換えて五角形ペンタゴナルに線入れたのが図7であるが、下位特性に各グループの偏りはないとみてよいであろう。

図7 自主性の水準別グループによる下位特性の平均百分率



検査の分析結果から自主性の水準を区分したグループ別に、余暇活動、ひいてはレクリエーション活動の程度差を明らかにしたのが第4章

の考察である。

3. 余暇活動について

余暇時間の過し方を質的量的に把握する手だてとなるように、平日、休日、さらには長期休暇に別けて活動内容や余暇時間量、活動仲間をたずねた。

余暇時間量は、平日では3時間から5時間が最も多く、上限を7時間まで広げると57.8%と過半数がその幅に集中した。他方、休日になると9時間以上が59.3%を占めた(表7)。

表7 平日および休日の余暇時間

時間数	1時間未満		1-3時間未満		3-5時間未満		5-7時間未満		7-9時間未満		9-11時間未満		11時間以上		総回答数	計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
平日	15	6.0	100	9.6	34	3.4	9	5	1.2	339	33.9	5	1.5	3-5	100.0	
休日	3	0.9	7	2.1	22	6.2	33	9.7	17.7	6.0	6.7	19.8	39.5	3.8	100.0	

昭和50年のNHK国民生活時間調査によれば、同世代(16~19才)の平均余暇時間が平日5時間39分、休日9時間29分であることから、訓練校生のそれも大差なく平均的と推察される。

表8 平日・休日および長期休暇の余暇活動 (単位%)

割合	平日	休日	長期休暇	長期休暇の構成
45%以上	TV・ラジオ(45.1) 雑誌・マンガ(5.1)	TV・ラジオ(47.9) のろ寝(42.8)	TV・ラジオ(42.4) のろ寝(40.7)	
30-40%		雑誌・マンガ(38.1) 読書(35.9) 日帰りのレジャー(33.2)		1泊以上の旅行(34.4) TV・ラジオ(31.6)
20-30%	のろ寝(28.6) のろ寝(27.7)	のろ寝(28.9) 読書(27.7) 雑誌(27.1)	雑誌・マンガ(27.7) 読書(25.4) のろ寝(25.0)	日帰りのレジャー(29.8) 映画・音楽会(28.4) 交際(25.9)
10-20%	交際(23.0) 将棋・トランプ(21.8)	ショッピング(24.8) 映画・音楽会(20.4)	映画・音楽会(20.4) 将棋・トランプ(20.4)	
5-10%	手紙(14.7) 読書(13.8) スポーツ(11.4) 雑誌(11.3) ショッピング(11.4)	読書の活動(14.4) 手紙(14.2) スポーツ(11.5)	1泊以上の旅行(13.2) 読書の活動(13.5) 読書(12.7) 読書(12.0) 読書(11.8) ショッピング(11.8) スポーツ(11.4) 手紙(11.3)	のろ寝(13.3) スポーツ(13.0) 将棋・トランプ(12.1)
5-10%	読書(8.3) 映画・音楽会(7.7) のろ寝(7.1) ランニング(7.1) 会合(6.5) オース(6.2) 日帰りのレジャー(6.2) ボランティア活動(6.1) 買い物(6.1) 読書の活動(6.1)	読書(7.7) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2) 読書(7.2)	読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3) 読書(6.3)	読書の活動(6.2) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1) 読書(6.1)
0-5%	1泊以上の旅行(4.0) 読書の活動(4.0)	ボランティア活動(4.0)	読書の活動(4.0)	読書の活動(4.0)

表8は、余暇時間の主な過し方を多肢選択法(M・A)でたずね、その結果を割合の多い順に並べた一覧表である。テレビ・ラジオ視聴が、平日休日にかかわらず最も多い余暇の過し方であり、表をみるかぎりこれを越す項目は見当たらないが、割合は休日、長期休暇へと移行するにしたがって下降している。同様な傾向を示す過し方には、「雑誌・マンガ」、「なんとなくぶらつく」がある。逆に、平日から休日になるにつれて上昇してゆく過し方があるが、これにはドライブを含めた「日帰りレジャー」、「野外活動」、「映画・音楽会」など日常生活圏域から脱却しようとする過し方が挙げられる。しかし、長期休暇になると休日にいったん上昇した割合が下降してしまうものに、「友人との交際」、「ショッピング」、「将棋・トランプ」などがある。また余暇時間量の増加に影響を受けないかのように活動割合が変わらない過し方に、「スポーツ」、「読書」、「趣味的活動」が含まれる。しかしながら、同じ変化量の小さい過し方でも「習いごと」、「ボランティア活動」などは前者に比べて皆無に近い割合にすぎなかった。

このようにみると、訓練校生は青少年でありながらも、全体的には行動型というよりはむしろ休養型余暇の傾向が強くあらわれている。しかし表8の第4列は長期休暇時の希望する過し方であるが、この段になると、「のろ寝」、「雑誌・マンガ」ばかりでなく「テレビ・ラジオ視聴」の割合も沈降して休養の傾向が消え、代って「1泊以上の旅行」などの観光的活動が浮上してくる。冒頭でも述べたところであるが、余暇の過し方を一義的にレクリエーションに求めることはできないが、代表的レクリエーション活動に該当すると考えられるスポーツ、趣味的活動、野外活動などの実施程度は相対的に低

い水準であった。

自由時間を一緒に過ごす活動仲間は、小中学校の同窓生という答が約 $\frac{1}{3}$ の32.4%を占めた(表9)。クラブ・サークルなど訓練校を中心とした仲間は意外と少なく、どちらかといえば家庭を中心とした居住地の仲間が多い傾向がみられた。

表9 余暇活動の仲間

仲間	人数	%
家族	29	8.6
下宿・寮	35	10.3
クラブ・サークル	6	1.8
訓練校	43	12.7
小中学校の同窓生	110	32.4
近所の人々	46	13.6
自分ひとり	39	11.5
その他	17	5.0
無回答	14	4.1
計	339	100.0

IV 結果の考察

余暇の過ごし方から代表的特徴をもつテレビ視聴とスポーツ活動を取り出して、自主性の水準による差違をとらえてみた。代表とした前者は、自由裁量性の高い時空間において不活発で自律性に欠けやすい活動であり、後者は活発で自律的な活動であるといえよう。

テレビ視聴時間は、表10のとおりであるが、

表10 平日および休日のテレビ視聴時間

視聴時間	みない	平日					無回答	計	
		1時間未満	1~2時間未満	2~3時間未満	3~4時間未満	4~5時間未満			
平日	人数 33	1.9	4.9	5.3	6.4	5.1	6.3	7	33.9
	% 9.7	5.6	14.5	15.6	18.9	15.0	18.6	2.1	100.0
休日	人数 20	5	1.7	3.0	5.2	4.7	15.3	1.5	33.9
	% 5.9	1.5	5.0	8.8	15.3	13.9	45.1	4.4	100.0

1時間単位の時間区分に割合の差が平日では小さいが、休日になると時間増加にともなって割合も漸増し、5時間以上の視聴が45.1%を占めるまでに広がった。この分布状態を二分する境が、平日では3時間、休日では5時間である。ちなみに、NHKの国民生活時間調査によれば、同世代の平均視聴時間は平日2時間21分、休日3時間58分であった。訓練校生の視聴時間は平均よりいくらか長いことになる。視聴時間を3時間を中心に4区分に仕切って、第3章の2節でグループ化した自主性の水準別にみたのが図8である。自主性の高いグループは、

図8-1 自主性の水準別みたテレビ視聴時間(平日)

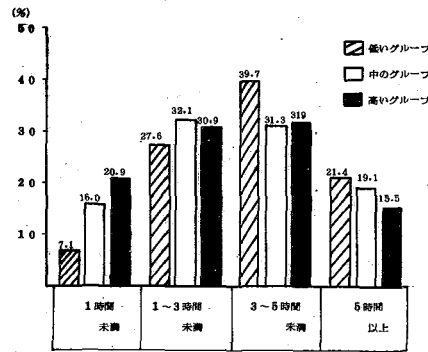
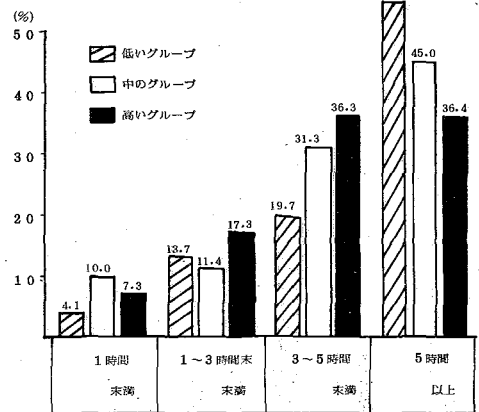


図8-2 自主性の水準別みたテレビ視聴時間(休日)



平日休日ともに低いグループと比較して視聴時間は短い傾向が明らかである。そして、時間増加に対する占める割合の相対的逓減率は、休日の方がより顕著にあらわれている。自主性が中のグループは、全体的であり、比例的配分となっている。

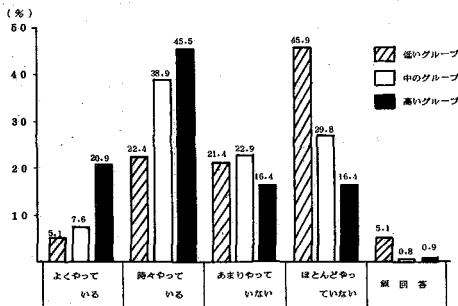
一方、スポーツ活動については、実施程度で「よくやっている」と「時々やっている」を加えるならば、47.5%がスポーツをしていることになり、反対に、「あまりやっていない」と「ほとんどやっていない」を加えた50.2%がスポーツをしていないことになる(表11)。

表11

実施程度	人数	%
よくやっている	38	11.2
時々やっている	123	36.3
あまりやっていない	69	20.4
ほとんどやっていない	101	29.8
無回答	8	2.4
計	339	100.0

すなわち、割合はほぼ半半である。テレビ視聴時間と同じ方法で自主性の水準別に、スポーツ活動の程度を4段階に仕切ってみると、スポーツ活動の実施程度においてもテレビ視聴と同様に、あるいはいっそう顕著に自主性の高いグループと低いグループには差違が生じた(図9)。

図9 自主性の水準別によるスポーツ実施状況



以上の結果は、分布割合をさらに整理統合した3×2の分割表において、カイ二乗検定によってテレビ視聴時間(休日)は1%水準、スポーツ活動実施は0.5%水準で有意性が認められた(表12、13、14)。

表12 自主性の水準別にみたスポーツ活動

活動程度 水準	する	しない
高いグループ	73 (66.4)	36 (32.8)
中のグループ	61 (46.6)	69 (57.2)
低いグループ	27 (27.5)	66 (67.3)

注1) 数は実数、()内は%、無回答は除去してある。

注2) 3×2の分割表によるカイ二乗検定の結果 $P < 0.005$ (d.f.=2)

表13 自主性の水準別にみたテレビ視聴時間(平日)

時間量 水準	3時間未満	3時間以上
高いグループ	57 (51.8)	52 (47.4)
中のグループ	63 (48.1)	66 (50.4)
低いグループ	34 (34.7)	60 (61.1)

注1) 数は実数、()内は%、除去してある。

注2) 3×2の分割表によるカイ二乗検定の結果 $0.05 < P < 0.1$ (d.f.=2)

表14 自主性の水準別にみたテレビ
視聴時間（休日）

時間量 水準	5時間未満	5時間以上
高いグループ	67 (60.9)	40 (36.4)
中のグループ	69 (52.7)	59 (45.0)
低いグループ	36 (36.7)	54 (55.1)

注1) 数は実数、()内は%、無回答は除去してある。

注2) 3×2の分割表によるカイ二乗検定の結果 $0.005 < P < 0.01$
(d. f. = 2)

V 総括

レクリエーション活動はある特定の活動を指すものではなく、心構えによって活動の意味も価値も大きく変わるものと考えられる。従って、多様な余暇活動の中からレクリエーション活動を形式的に分類することは容易ではないが、今回の調査においては、余暇の過ごし方としてはもっとも手軽で安易なテレビ視聴と、それなりの準備と配慮を必要とするスポーツ活動に焦点をしばり、自主性という心理的特性を軸に活動の分析を心みたわけである。

その結果、対象となった訓練校生の余暇活動は全体的に休養的傾向が強く、また、自主性は比較的低い水準であったが、自主性の水準別グ

ープによる差違は、テレビ視聴時間量とスポーツ活動実施程度において明瞭となった。

今後の課題としては、自主性の診断で用いた心理テストの妥当性をより検討するために、同世代である高校生などを対象に実施する必要があると考える。

参考文献

- 1) 江橋慎四郎編「余暇教育学」（講座余暇の科学3、垣内出版、1978
- 2) 松原五一、「レクリエーターへの道」、日本レクリエーション協会、1975
- 3) 石川 勤他、「自主性診断検査解説」、金子書房、1977
- 4) 労働省資料、「全国職業訓練校便覧」
- 5) 文部大臣官房調査統計課、「学校基本調査報告書」
- 6) 総理府統計局編、「日本の統計」、大蔵省印刷局、1977
- 7) 総理府青少年対策本部編、「青少年の連帯感などに感ずる調査」、大蔵省印刷局、1976
- 8) 総理府青少年対策本部編、「青少年白書」1977
- 9) 前掲書「青少年白書」
- 10) 前掲書「青少年白書」
- 11) 前掲書「自主性診断検査解説」
- 12) 日本放送協会放送世論調査所、「昭和50年度 国民生活時間調査」、日本放送出版協会、1976
- 13) 前掲書「昭和50年度 国民生活時間調査」